受け継がれた蜜　およびその他十一篇

エフライン・バルケロ[i]
三角　明子　訳

詩芸術

わたしは肉と骨のシンボルでいっぱいだ
そしてわたしのうたは地上の工場だ
そこでは詩行が苦しみ、人間たちと同じ強度で
労働にいそしむ。

わたしのうたはきつい労働の一日から生まれる
時間に揺さぶられた製品だ
理不尽な人生に従わされた
貧者のやるせなさを身をもって知っている。

わたしの声は絨毯で和らげられてはいない
ぱりっとした韻律はなく
最新流行の語調をまとって歩いたりもしていない。

それより、すすり泣きで終わりの数文字を呑みこむ
侮辱された叫びと言うべきか。
それとも、ほとばしる蒸気の音と槌に叩きのめされた
木造建築物と。
あるいは、砕けた血に溺れた肺結核患者が立てる
不快な音調と。

わたしはクスリも白鳥のペンもつかわない
ワックスで磨き立てられた床を滑りながら書きもしない。
大抵の場合、集会では却下されたインスピレーションが
ぐいぐい押してくるにまかせる。
肉体労働者が事故に遭うたび
手持ちの白紙で血を止めようと
かたわらへと駆け寄りながら
わたしは生と死の本質について
とりとめなく思考をめぐらす。

ほんとうはわたしの書くことばが微笑むことはまずない
大抵は気ぜわしく歩きまわっているし
いつもいい匂いがするわけでもない。
だが殉教者の彫像であふれるわたしの地区を見てくれ
労働者が妻に告白する内容を聴いてくれ
その苦学生がどうやって食べつないでいるのか聞いてみてくれ

鉱山に入れ。それ以外の、人間が物質を支配している
どこにでもいい。
そうしたら汚れているのはかれらのシャツではなく
引き裂かれたかれらの肺だとわかるだろう
その肺はもう、世界中の金を集めても
きれいに洗浄することはできないだろう。

Arte poetica

・・・・・・・・・・

受け継がれた蜜

わたしの祖父は大地をうるおす
無数の手、目、耳であふれんばかりの川だった
同時に一本の樹のように盲いて寡黙
昔からのあごひげで家の深い声だった
種まく人であり稔りでもあった。ごつごつしたブドウの株
時の指標であり幸先のよい血

わたしの祖父は花咲く両手を持つ冬だった
大地をうるおし命を迎えるためととのえる川そのものだった
祖母は幾度もの誕生で湾曲した大枝だった
台所に座る、家の顔だった
パンの匂い、しまっておいたリンゴの匂いだった
ローズマリーの手、魔よけを唱える声
ささやかな甘味のように砂糖をまとった
めぐりくる冬の貧しさだった
十五人の子どもたちがその奇跡の手から食べていた
十五人の子どもたちがその鷲の夢を抱いて眠っていた
たくさんの孫や曾孫たちが続き
祖母のやせこけた腕を通り抜けていった
だが彼女はつねに水と小麦粉を混ぜる手だ
眠る鳥たちでいっぱいの、夜の沈黙だ
逃げるトルティーリャ[ii]を備えた幼少期の火鉢なのだ

わたしの父は一番大地に似ていた
トウモロコシか小麦と一緒に生まれてきたに違いない
父は浅黒い肌で、馬の背で眠った
ゆったり行く春の騎手のようだった

他のおじおばたちはみんなこのあたりの鳥に似ていた
みんな樹や山岳地帯とどこか似通っていた

幾人かはペルシュロン馬のように強壮だった
ほかの者たちは石か小麦色の顔をしていた

だがどのひとも大地に一番近しいものごとは覚えていた
家いっぱいに荒れ狂う蜂の群れだった
雨を告げるナンベイタゲリの一群だった
サクランボをつつきまわすツグミだった

わたしはかれらが年を取ってから生まれた。祖父は
白髪で、あごひげが霧のように祖父を遠いものにしていた
わたしは五月のかがり火[iii]が燃え盛る頃に生まれた
最初に思い出すのは川と大地の声なのだ

整った食卓

おまえがテーブルの中央からナイフを抜いて
ひとの背の高さの位置で壁に埋め込むのなら
種をもってパンを呪うことになる
手を切るのにおまえの父が、使うナイフを汚すことになる。

La miel heredada

子どもたちが互いを見分けるように。自分のきょうだいから隠れたりしないようにと
もっともまじりけのない血をとるために使うナイフを。
父はひとり、雷で耳をやられ、稲妻で目がくらんだまま
裸の頭にその血を受ける
年取ってから子が生まれる知らせのように受け取る。
あるいはすぐそこに来ている不運の予兆として。

それはたんなるテーブルではない。石だ。夜、触れてみるがいい。
血の鏡のように凍てついた
そのテーブルにつくと誰もひとりではなく、顔で判断される。
触れて、自分自身に戻れと頼んでみるがいい。
というのもこのテーブルが存在しなかったら、わたしたちは片手で太陽に
もう片方の手で月に触れることもできないだろうし
ネズミのように暗がりで穀物を食べることになるだろうから。

それは、誰にも動かせなかった古いテーブルだ。
その位置を変えることができるのは四季の光だけ
それともあの新しい客たちが、聞いたこともない声を使うか。
不在にしていた者はいつも同じ場所にテーブルがあるのを見る
つねにおのれの正面にあり、背後にあることは決してない。
というのも人間はおのれの最初の思い出の年齢だからだ。
そして不在にしていた者は、その年齢に向かって歩くたび成長していく。

食卓の用意ができているということは誰かが来るのだ。
もっとも孤独な家にも用意された食卓を見たことはないか？
ワイングラスの輝きと
すべてのテーブルの新鮮な塩の色だけに照らされて
テーブルが時間からあらわれるのを見たことはないか？
しかもそのテーブルは、一番待ち望まれていた日に見るよりも美しい。
おまえが成長した子どもの目で
それとも花を飾りつける老女の目で見ているからだ。

愛情を注がれた家というものは清潔なテーブルの匂いがする
樹木の群れなす待機に用意されている
誰ひとりその樹を思い出せないし忘れることもできない
存在するものはすべて同時に生まれたからだ。
蜜蜂たちを導く見えない点に
われわれの手が届くようにパンとワインをセットしてあった。
それは手を伸ばすたびにおまえが
すべての人間の手を触れているのだと思い出すためなのだ。

La mesa preparada

かまど

暗い色の湯が沸騰するかまどを
かれらは決して消さなかった。

影に隠れた二本の手が
新しい薪を投げ入れる。
たっぷりの水と神秘をたたえた
新しい手桶がつぎつぎに運ばれてきた。

肉がひとかたまり焼かれた。
パンがひとつ灰からあらわれた。
焦がし砂糖の習慣が
その沈黙をさらに古風にさせた。

しかし、誰ひとり岸辺から離れなかった。

何人いたのかもわたしにはわからなかった。煙が
夢のようにかれらを包んでいたので。
顔も見分けられなかった。沸騰する
湯がかれらをずいぶん遠ざけていたので。

とつぜん誰かが入ってきた。

だが誰ひとり自分の席を立たなかった。

火は燃え続け、湯は沸き立っていた。

埋められたナイフ

そのひとの顔は仮面のようになった
発掘されたパンだけをひとびとが食べるあいだに
水と大地でできたその仮面を涙が溶かしていく。
すべての部屋を開け放ち
壁かけ時計を横たえ、鏡を覆う。
どうすればいいのだ。年月で黒ずみ、大きな
深い後悔の念にむしばまれた古いナイフを手にとる。
魚のなかの海のようにむき出しの、
ひとつだけの種のなかの大地のようにむき出しのナイフを手にとる。
ナイフをとり四方を見渡しながら
パチパチとうちにこもった音を立てて偉大なパンの上に埋める。
まるで、差し伸べた手のひらを貫いていくかのように。

ナイフをもう一度ぐっと握り、筋肉に傷を一つつける
その同じパンの一片から吸収する
まるで今からはそれがおのれの食べ物になるのだというように。
そしてひらいたふたつの傷口の血を確かめる。
自分でつけたものと、他人についたのを見たことがないものを。
答えひとつない。テーブルに置かれた十二個のグラスに
縁までワインを注ぐ。
その後グラスを天井と壁に叩きつけて割る。
大いなる沈黙が訪れる。そして目を閉じ
身じろぎせずに待ち構える。

激減した家族

この時間のわたしたちはもっとも激減した家族だ
そして母さんあなたは、もっとも濃い影だ
死にかけた雄鳥を腕に抱いた男の子が
やってきてその隅っこに座る

母は打ち壊された家のように泣く
泣くことを知らないすべてのものとともに泣く
テーブル、寝床、挽き石。
というのも、見知らぬ場所で倒れたひとびとの
名前を胸に抱きしめているからだ
死者たちはいま、母の歯抜けした口のなかで輝いていることだろう

母は壁の顔のない孤独を
割れた爪先でひっかきまわす
その間に鍋ではなにかが緩慢に溶解していく
鳥のような、深い思い出のようなにかが
表面の焼け焦げた羽にまるごと覆われて

前日

照らしておくれよ母さん／武装した三人の男が
戸口でおれを待ってる／自分のことも照らしなよ
カーバイドの土色のあかりで／おれが来た

Familia diezmada

道を照らして見せてよ／川みたいな
樹の幹につながれて／新鮮な飲み水を
一杯くれよ／母さんの目の前で
この恥ずかしい体を
神聖な節度をもって／洗うために／まるで
もう一匹の蛇とつながった蛇を見るみたいに／照らしておくれよ

夜の四隅をおれのために／おれを
ずっと隠しておいてくれてた所を／どこでもいいから道で
別れよう／母さんももう若くないから
おれをもう一度産むのはできないね／おれがいなくなる
とき母さんよりもっと年寄りになってるだろうな／照らしておくれよ

テーブルの四隅を／昨日
そこで一緒に食べたね／すべての時刻のなかで
いちばん忘れられた時間に／前の日／言ってくれよ

もうふたりとも存在しなくなったらあんたが誰なのか／母さんも

同じことをおれに聞いてよ／おれの口を
母さんの沈黙で照らしておくれよ

結び目

わたしが抱きしめるとそいつの石のように固い骨が
話しかけてきた／日々の影のように
たよりない骨が／放せよ
と弱々しくうなった／おれは大海原に消える一掴みの砂みたいに
消え失せたいんだ／立たせて
くれ／両腕を開かせて／そうしたらおれは
すべての場所に近くなるだろう／なにひとつ忘れ去られない
所に置いてくれ／最高に抜け目がない
手の肘に固定して／掘ったまんまの
地下水がほしい／コップなしで／水が流れるのを
聞いていたいだけなんだ／ブドウの芯のところで凝縮する
雫を何滴か飲みたいんだ／あの冷たく
なる雫を／夜に触れると
輝くやつを

たそがれの家族

管区は悲しい男の匂いがした。
すべてが人であふれていたのに
だれも
あのよそ者を待ってはいなかった。そして待機は
日暮れていった。雨や雪が降った。外では時がそんなふうに時が流れたが
その男は内で物乞いをしていた
かれの顔の写真に老いが刻まれていった。

女がひとりごとを言っていた
そして男の子がひとり、けぶる思いに沈んでいた
すこし前に沈んだ太陽の光のような
秋の名残に似たものがあった。
ふたりの手と喉のうちは寒く
みんなでひとつのテーブルを囲んでいるようだった
苦みを口に抱え
居心地の悪い魂を抱え
見つけられないポケットを探しながら。

男の匂いがしていた
といっても日暮れた男のことだ
戻るのを忘れた男のことだ。

濡れそぼり名を持たない家族の匂いがしていた。
雨降る大地の、雨が降った海の匂いがしていた。

愛する人の体を取りもどしたいだけ

彼女たちは愛する人の体を取りもどして
犠牲のパンを永遠に食べたいだけだ
引き裂かれた女たちの血まみれのシーツで
父は眠り、息子はまだ目覚めない。

大地の兵器によって砕かれた彼女たちは
鉱山の通洞口で抱きあって眠る。
老いた焼物師の足もとで
じぶんのパン生地の中で世界の喪失の水気をとる

パンをこね、古い窯炉のそばで
死者たちの記憶のなかでパンを育む
そして動物たちが放棄を産み落とす石のうえで
おのれの白髪の小麦粉をふたたび挽く。

Familia anochecida

というのも、あの樹に命を与えた女たちは
内蔵がフックに吊るされすべてを奪われたのだ。
男がおのれのテーブルのナイフであり続けられなかったとき
女たちの内蔵はドアに結びつけられたのだ。

織って織りつづけた偉大な織女たちは
ある夜、織物を引き渡した
その車輪にとどまり
死の羊が彼女たちの骨を保護するのを待った。

海と山頂の孤独を抱え
彼女たちは傷ひとつ負って寝床に入った。
まずひとりの男を見た。それからいのちを見た
まず男の子を見た、それから死を目にした。

咎人はひとりで

おのれのうす暗い巣穴からひとりで出てくるのなら
わたしたちはドルで膨らんだそいつの書類鞄を探したりはしない

Solo quieren rescatar cuerpo amado

捜すのは窒息させた腕だ単に命じただけかもしれないが
その腕の誕生、そいつが入った革のケース
そしてその四肢の誕生ひとつひとつだけだ。

顔を見てもほほえみを見つけても
わたしたちは例の大いなる神秘の呼び声を感じたりはしないだろう。
どんな言葉より強くひとを縁付かせるあれ
獣たちを赦せと強いてくるあのまなざしでも同じだ。

人々のその無防備な部分はわたしたちにはなんの意味も持たないだろう
喉、そしてその喉の罪を赦す裸性。
殺人者を隠すその偉大な人間性の
断片も。かれの背中は
パンを包む白いふきんを思い起こさせる。

どれも駄目だ。そいつの裸足も。だれかが宿りあまやかな手で不在を
織りあげているそいつのこめかみも。
ひとりの人間の前にいるのだと感じさせるものは何もないだろう
猛獣でさえも嫌悪させる熱い湯気を
かぐために血を注いだ誰かの前にいると感じるだけだろう。

やつはおのれの子たちのまなざしの前にひとりでいるだろう
子どもたちもすでに父親と同じ振舞いを身につけているかもしれない。

しかしかれらは、父親の恥を身にまとっているだろう
かれらは恥をその肩にしたたる肌のように身につけ
種と、かれらの母親の体を創造主が罰するのを見まいとして
顔をそむけることだろう。

やつはひとりで岸辺のないかれの血に入っていくだろう
おのれの手が注いだ血を洗礼するために。

・・・・・・・・

からっぽの場所

両手を見つめたり、空をつくづく眺めたりしていた
きみのしぐさのひとつひとつが今はもっとよくわかる。
きみの不在がいまおれたちに言ってくるのと同じだ
一緒にいるひとをちゃんと見なさい手遅れになる前に、という意味なのだ。
みんな行ってしまう、なにかが起きると見通したみたいに。

Está solo el culpable

一度にみんなが戻ってくる、まるで示しあわせたみたいに。
きみはまえと同じ場所にいつもいる
というのもなにかが起きたらふたりともあの空白の点を見るから
幻視者の顔をした宿命の見えない一つ目を見るからだ。
きみはちょうどそこにいるだろう、ずっといたところに。
一日の最後の光をあきらかにしようとするように。
ひとりひとりにあてがわれた空間の秘密とともにあの場所が開いた。
墓石でもなく霊廟でもなく、きみの先祖たちの
最初の犠牲をきみが思い出していた聖なる場所だ。
誰かにとってきみは死んだがおれには違う
だっておれは毎日その空白の場を見つめる
きみが、きみとおれの血を混ぜたときにおれに書いた
書かれたことのない詩のページのように。

きみがどこにいるのかおれは絶対きかない

きみが生きていようと死んでいようと、おれのしぐさは同じ意味をもつ
きみの服のどれかを撫でたり、それとも空白にいなくなることも。
きみがどこにいるかもおれは絶対きかない。突然にあらわれて

El lugar vacío

きみに驚きを与える喜びが損なわれるだろうから。
きみから遠くにいるとも感じない。二、三歩離れてるだけだ、樹が花をつけたとか
誰かがやっと手紙をくれたとかを発見して近づきあう前に
ちょうど習慣がくれたのと同じ距離だ。
きみがおれに言いたかったことはみんなここにある、きみが見えない
メッセージを書いて寄こす木の葉一枚に
葉が枯れたら読めるようになり、塵になって消える。
人生はこんなものだ、きみは死んでるとはもう言えないだろう
だってきみは葉っぱの手紙を似た感じで作ったし、おれはいつも間違えて
きみのことを訊ねてくれたひとたちにきみが生きていると思わせる。
こうしておれはきみの死を生きてる、一瞬でもいいからふたり一緒に
生きた人生を生きてくれと誘いながら、一日に数時間か
数カ月に一日、ほかにもたくさんのことを足しながら。

Nunca me preguntó donde estás

註

（i）二〇〇八年にチリ国民文学賞を受賞した詩人エフライン・バルケロ（Barquero, Efraín, 1931-）は、「炉辺の詩」（poesía de los lares）的傾向を持つ詩人のひとりである。ホルヘ・テイリエル（Teillier, Jorge. 1935-1996）を中心とする［炉辺の詩人］たちは、テクノロジーの急速な発達にともなう人間存在の希薄化へのこたえとして、チリの大地に根ざした詩世界を志向し、郷愁をひとつのキーワードとした。

この小作品集は三部構成とし、冒頭に第一詩集　*Piedra del pueblo: 1951-1953*『民衆の石　一九五一―一九五三』（Santiago de Chile, Editorial Alfa, 1954）から、初期バルケロの詩人としての姿勢を明らかにする「詩芸術」を置いた。九篇をおさめた第二部は、家族やチリのひとびとの歴史的記憶をテーマとして構成した。そこに、一九七三年の軍事クーデタによる惨劇やその後の亡命が落とす影は見過ごすことができない。訳出した詩は、一九五六年出版の*La compañera y otros poemas*（Nascimento）『伴侶およびその他の詩』から「愛する人の体を取りもどしたいだけ」、一九五九年出版の*Enjambre*『蜜蜂の群れ』（Zig-Zag）から、「受けつがれた蜜」「かまど」、亡命中の一九七四年にメキシコで出版した*El libro negro de Chile*『チリ黒書』（1974）所収の「整った食卓」「激減した家族」「咎人はひとりで」、亡命生活での沈黙後、最初に帰国した一九九二年にチリで出版した三冊の詩集のうち*A destiora*『折悪しく』（Sudamericana）より「前日」

と「結び目」、*Mujeres de oscuro*『暗闇の女たち』(Sudamericana) より「たそがれの家族」を採った。その後一九九八年に出版した*La mesa de la tierra*『大地のテーブル』(LOM Ediciones) からは、「埋められたナイフ」を収めた。最後の二篇（「からっぽの場所」「きみがどこにいるかおれは絶対きかない」）は、長い年月の伴侶であった妻エレナの死を経て発表された最新詩集 *Escrito está*『書いてあるように』(LOM Ediciones, 2017) から採った。

(ii) 逃げるトルティーリャTortilla corredora　トウモロコシの粉で作った薄焼きパンの一種であるトルティーリャが、食べられるのがいやで逃げ出すチリの昔話。

(iii) 五月のかがり火　las fogatas de mayo　バルケロは、チリで広範囲に祝われる「五月の十字架まつり」当日の五月三日に生まれた。このまつりは五月二日の夜から三日にかけ、キリストの受難と復活を祝う。バルケロの生まれたクリコなどでは、町の中心の広場で焚いたかがり火の周囲を踊る風習がある。